

## インドネシアにおける観光現象の諸相

神田 孝治

筆者は、大阪市立大学都市文化研究センター COE 研究員として、2003年5月12日から5月27日までと、6月6日から6月16日まで、インドネシアに滞在し、サブセンターの運営ならびに研究活動に従事した。本稿では、「観光と地理的想像力に関する文化地理学的研究—アジア地域を中心として—」を研究テーマとする筆者が観察した、インドネシアにおける観光現象の諸相について簡単に報告したい。

サブセンターの所在地であるジョグジャカルタは、ジャワ島随一の観光地である。ジョグジャカルタには、王侯の住まう王宮、王と貴族の遊び場であったとされる水の宮殿、鳥を中心とした動物の市場であるガスン市場、ワヤン・クリックと呼ばれる影絵芝居などの伝統芸能、パティックと呼ばれる染色工芸など、多くの観光資源を認めることができる。また、ジョグジャカルタ市街から車で1時間圏内には、1991年に世界遺産に指定された、仏教遺跡のポロブドゥールやヒンドゥー教遺跡のブランバナ寺院群も存在している。そこで、特に5月の滞在時には、サブセンターの運営業務を行いつつ、交流協定を結んでいるガジャマダ大学の学生の案内によって、これらの観光地を視察した。

興味深かった事象をいくつか指摘しておきたい。一つ目は、熟練した観光ガイドの存在である。特に水の王宮に住み着いている人々は、自然な会話で観光客に取り入り、観光スポットについての深い知識を披露しつつ、巧みな話術でパティックの店舗に連れて行こうとするなど、卓越した観光ガイドとしての技芸を見せていた。それは、王宮などにおける公的なガイドと

は格段のレベルの違いがあり、特定の地域住民における観光ガイド技術の生成・継承の問題として、注目に値する事例だと思われた。

また二つ目として、観光地における物売りの構成・分布がある。インドネシアでは、男性の大人の物売りが多く、子供のそれはほとんどみかけることがなかった。そして、ポロブドゥールなど有名な観光地では、信じられないほど多くの物売りに取り囲まれる事態に陥るが、それがブランバナ寺院群になるとほとんど露店のみになり、よりマイナーな観光地になると全く姿を見なくなる。このような物売りの大人の多さや観光地における極端な差異については、観光と住民の生活の関係性に注目して、特に経済学的な視点からの検討を要する問題のように思われた。また逆に、観光客側にとっては、多くの物売りの存在が観光地としての俗化の指標ともなりうるため、観光地の発達と、観光客のまなざし、そして物売りの存在について、その相互関係の考察が必要とされると考えられた。

三つ目として、地元の宗教と観光との関係性を挙げたい。これは、インドネシアの研究においては主要な研究テーマの一つであろうが、ジョグジャカルタから車で2時間ほどの距離にあるソロという街から、さらに1時間半ほど山奥にあるチュト寺院は、この問題について考えるにあたって特に興味深い場所であった。チュト寺院と、よりソロに近い位置にあるスクー寺院は、ガイドブックに「マヤ文明調」などと描かれるほど、神秘的な古代遺跡であり、インドネシアの他の地域では見ることができない独特なものであった。特に筆者がチュト寺院に足を

踏み入れた際には、とても観光客とは思えない目つきの悪い男性が多数徘徊しているのを確認し、そこに異様な雰囲気を感じ取ることとなった。現地の村で聞きたいいくつかの話を総合すると、その日は年に数回ある神聖な儀式の日で、各地から信者が集まっていたとの事であった。ただ、チュト寺院の中の男性に話を聞くと、皆、「何でもないよ」、などといって儀式の開催を秘密にし、観光客との交流を拒絶しようとする強い意志を伝えてきた。このチュト寺院に到着するには、山奥であるためかなりの労力を要するが、案内所らしき場所にあるゲストブックから、欧米人をはじめとして一日に少なくとも20から50人の観光客が来ていたことが推察された。これらのことから筆者は、チュト寺院を「マヤ文明調」の遺跡などと考えて訪れる観光客と、そこを信仰の対象とする現地の人々の間にある、摩擦やズレについて考察する必要性を強く感じるようになった。ちなみにガイドブックには、ここがソロ精霊信仰の総本山であり、聖夜には信者が本殿の上で一晩中祈り続けるとあった。ただ、多少の聞き取りによれば、チュト寺院を管理するチュト村は、イスラム教徒が9割以上を占めるジャワ島にあっては、数少ないヒンドゥー教の村だということであり、また儀式に集まる人々はヒンドゥー教徒ということであった。チュト寺院の信仰について考察することで、インドネシアの宗教に関してその複雑な様相の一端がより明らかになるようにも思われた。

また筆者は、後半の6月の滞在時を中心に、インドネシアで最も著名な観光地であるバリ島の観光現象についても観察した。2002年10月のバリ島クタにおける爆弾テロ、2003年5月頃からアジア圏で勢いを増したSARS、さらには同時期に激しくなったアチェ紛争をはじめとするインドネシアの治安悪化の影響で、バリ島への観光客は激減しており、聞き取りによると、老舗のビーチリゾートであるサヌールでは全盛期の1割、バリ芸能の中心のウブドでも全盛期の4割程度しか観光客が来ていないとのことであった。ジョグジャカルタにて、バリ島のジンバランにある高級ホテルのフォーシーズンで働く二人の日本人女性に会ったが、彼女たちも観

光客が少ないがために休暇をとらされているとのことであった。その他いくつかのホテルでもかなりの数の従業員を解雇したとの話を聞き、バリ島においては観光産業がかなりのダメージをうけていることがうかがわれた。現在のバリ島は、近年急速に問題として浮上してきた、観光とセキュリティの関係性を考えるにあたって、特に注目すべき場所となっているように思われた。

調査期間中、バリ島における主たる滞在地はウブドであったが、そこでの従業員をはじめとする現地の人々の言説は興味深いものであった。ウブドは芸能の村であるが、既存の研究でしばしば指摘されるように、パロダンス、レゴンダンスなどといった踊りは、純粋に昔からあった芸能ではなく、西洋人によって考案されたものであり、それはまさに「伝統の創造」といわれるような、観光客向けにアレンジされた観光文化である。そして、この観光文化の芸能を、偽物だとして観光客に暴いてしまうのは、観光客ではなくて、他ならぬ現地の人々であった。彼/女たちは、観光客向けの定期公演を、本物の踊りではないと言い、自分の村をはじめとした観光化されていない踊りを見るようにと観光客(著者)に幾度も勧めてくれた。もちろん、その村の踊りも、おそらくは、植民地統治下において、創られた伝統といえる芸能文化である。ここでは、それが観光客向けか、現地住民向けかによって、偽物の文化と真正な文化の分別がなされていたといえる。さらに、宿泊場所についても、ホテルに滞在しては真のバリはわからないので、自分の家に宿泊するように、それならタダだしもっと楽しいはずだと盛んに誘われることとなった。そして、このような申し出の一方で、彼/女らは、観光産業によって現金収入を得なくてはいけないため、しばしば若干の葛藤に直面しつつ、知人のホテルを紹介したり、(ガイド料を期待して)付近のガイドを申し出たりもしていた。バリ人の多くは非常にフレンドリーだが、それは観光地のホストとしてのホスピタリティであると同時に、普通に友達になりたいという心情でもあるようだった(さらに、そこには外国人の友人が多いと村内での地位が若干高くなるという、観光地の村に

おける独特の社会構造も影響していたことがうかがわれた)。そこに、自文化のアイデンティティの問題や、生計を立てるべき観光産業の問題がからまり、彼/女らの態度に葛藤や矛盾を生み出してしまふようだった。比較的これまでも論じられているホスト側の観光文化の問題は、非常に複雑なものであり、まだ探求されるべき余地があるように思われた。

最後に、バリ島で注目したものとして、ウブド近くのバトゥアン村の絵画を挙げたい。この絵画は、ウブドと違って西洋人の影響をあまり受けていない伝統的なスタイルとされるが、近年のバトゥアン・スタイルの絵画には、観光客が描き込まれたものをいくつか確認することができる。ウブドのネカ美術館には、バトゥアンのワヤン・ベンディやマデ・ブディといった画家のこのような絵画が展示されている。ただ、バトゥアン村で聞き取りをしてみると、観光客を描く絵画はこの村で一般的なスタイルではなく、ベンディなどの著名な画家のみに許された技法であり、同じ村の住民であっても真似する

ことは許されないとのことであった。そのため、村で生み出され継承される文化というよりは、数人の作家の個人的な文化・技法・まなざしの問題になったが、さらに残念なことに、最も有名な画家のベンディは、ほとんど海外に行っており、奥さんも彼が何処にいて何時帰ってくるのか全くわからないとの事であった。現地の人の観光客に対するまなざし、観光地における芸術の創造、といった問題を考える上で非常に興味深い事象であったが、その調査には多くの困難が予想されるものとなった。

以上、短い滞在期間であったが、いくつかのインドネシアにおける観光現象の諸相を確認することができた。既存の観光研究においてしばしば取り上げられてきたバリ島をはじめとするインドネシアであったが、現地での観察によって、まだいくつかのなすべき課題が見えてきた。そこで、これらを今後の課題の一つとして、COE 研究員としての研究を進めていくことにしたい。